ラテンアメリカ都市物語

＝第14回＝

常春のグアテマラ市

大木 雅志

私がグアテマラ市に赴任した時、高層ビルが立ち並ぶ姿に驚いたことを覚えている。グアテマラと言えば、香り高いコーヒーが作られる農園やマヤ文明の遺跡を思い浮かべてしまうが、首都グアテマラ市はそのイメージとは正反対の第一印象であった。標高約1,500mに位置するグアテマラ市は、「常春」と呼ばれる気候で一年中過ごしやすい。乾季には少し気温が上昇するが、乾燥しているのでそれ程暑さを感じることはない。エアコン要らずの快適な気候である。なお、グアテマラ市に四季はない。季節は、乾季と雨季の二つだけである。グアテマラでは、11月～4月の乾季を夏（verano）と呼び、5月～10月の雨季のことを冬（invierno）と呼んでいる。

また、日本では「中南米」あるいは「ラテンアメリカ」と一括りで語られることが多いが、中米地域は他のラテンアメリカ諸国と趣が異なる点も多い。特にグアテマラは、先住民の割合が60%を超え、先住民文化が色濃く残る国である。グアテマラ市においても、ウイピル（huipil）と呼ばれる服を着て歩いている人をよく見かける。

市内で近代的な高層ビルや大型ショッピングモールが所狭しと並んでいる中、建物の外では先住民が民族衣装を着て歩いているという対照的な姿は、現代のグアテマラという国を表しているようにも感じられる。世界銀行のデータによれば、グアテマラのジニ係数（所得分配の不平等を表す指標で、1に近づくほど所得格差が大きい）は0.483であり、世界の中でも貧富の格差が大きい国の一つである[1]。グアテマラ国立統計院によれば、特に先住民の貧困率が高い状況にある。

グアテマラ市の歴史

グアテマラ市の正式名称は「ラ・ヌエバ・グアテマラ・デ・ラ・アスンシオン」という長い名前であるが、「シウダ・デ・グアテマラ（グアテマラ市）」と呼称されることがほとんどである。国内では単に「シウダ（市）」と呼ばれることもある。

グアテマラには、スペイン植民地時代に200年以上にわたって総督府が置かれ、中米地域の中心地であった。当時の首都は、サンティアゴ・デ・ロス・カバジェーロスという都市（現在のアンティグア・グアテマラ）であったが、1773年の大地震で壊滅的な被害を受けると、現在のグアテマラ市に遷都した。グアテマラ市は、その後成立する中米連邦の首都となり、発展することとなる。新都グアテマラ市は、ラ・ヌエバ・グアテマラ・デ・ラ・アスンシオン（聖母被昇天の新しいグアテマラ）と名付けられ、旧都はアンティグア・グアテマラ（古いグアテマラ）と呼ばれるようになった。

現在でもグアテマラ市は、中米地域の中心的存在であり、PARLACEN（中米議会。中米統合機構の立法府）の議事堂やSIECA（中米経済統合常設事務局）も市内にある。

グアテマラ市の発展

グアテマラ市は、中心部から弧を描くようにらせん状に都市が拡大した。各地区には番号が振られ、第25区まで広がった。その後、第20区、第22区及び第23区が他市に統合され、現在は計22の区に分かれている。各地区には特色があり、例えば第1区は政治の中心地として、国家文化宮殿（政府の公式

行事が行われる)、政府庁舎、中央銀行、グアテマラ市庁舎等が並ぶ。歴史的地区(旧市街)とも呼ばれており、国立劇場や大聖堂等の歴史的建造物も第1区にある。

ビジネスの中心として発展しているのが第10区である。ビバ地区(新市街)とも呼ばれ、オフィスビルや高級ホテル、レストラン、ショッピングモール、大使館等がこの地区に集中している。週末になるとショッピングモールに市民が集まり、特にサッカーの試合(スペインのリーガ・エスパニョーラ)があると盛り上がる。隣の第9区にもオフィスビルや大型展示場がある他、パリのエッフェル塔を模した「改革者の塔」と呼ばれる鉄塔がある。高層マンションやゲーテッド・コミュニティー(ゲートを設けて塀で囲まれた居住区)が多い第14区は、比較的治安が良いとされ、外国人居住者も多い。隣の第13区には、ラ・アウロラ国際空港がある。空港がある場所は、かつては郊外とされていたが、都市の拡大により、住宅街のすぐそばになってしまった。

一方、政治・経済の機能が市内の中心部に集中した結果、渋滞が深刻化している。そのため最近では、郊外の第15区や第16区を開発し、機能を分散させる動きもある。例えば、このエリアには、「Ciudad Cayalá」という商業・居住コンプレックスが開発されており、高所得者が集まり始めている。また、現在第10区にある米国大使館も第16区への移転を決めている(同大使館の発表によれば、2018年に着工しており、2022年に竣工予定)。

開発が進む郊外(写真はすべて筆者撮影)

グアテマラ市の治安

このようにグアテマラ市では、高所得者層が集まる地区の開発が進む一方で、低所得者層が集まる地区もある。これらのいくつかの地区では、ギャング(pandilla)が町を牛耳っており、日常的に強盗や殺人が絶えない。

グアテマラ政府の発表によれば、2018年の殺人発生件数は、国全体で3,884件(10万人あたり22.4件[2])であり、首都での殺人件数も多い(なお、日本における2018年の殺人認知件数は915件で、10万人あたり0.72件[3])。年々治安が良くなりつつあるが、まだまだ安全とは呼べない水準である。体感治安としては、銃を持った警察官が町を歩いているところを見ると少し緊張してしまうが、慣れてくると警察官や警備員がいないと不安になってくる。夜は人通りが少なくなり、車もあまり走っていない。市内では帰宅ラッシュ時には大渋滞が発生するが、夜9時を過ぎると、車の行き来もめっきり減って静かになる。

私が驚いたことの一つとして、高い塀で囲まれているレストランが多いことである。外からではレストランかどうかも分からないこともある。当然、メニューも外に掲げられていないため、メニューを見てからレストランに入るか決めようということはできない。物々しい外観であるが、塀をくぐると、外からでは想像できないくらい内装がきれいな空間が広がっている。外の治安が悪いため、ほとんどの人が車で移動し、歩く人は少ない。その分、駐車場はとても整備されており、大型ショッピングモールになると駐車場が地下3階まであり、ショップよりも広いのではないかと思ってしまうほどだった。日本の都市部では車は一家に一台だが、グアテマラでは一人一台なので、駐車場の数はいくらあっても良いのかもしれない。

体感治安が悪いと書いておきながら矛盾してしまうが、毎週日曜日の10時から14時までは、市内のラ・レフォルマ通りやラス・アメリカス通り等の目抜き

通りが歩行者天国となる。その時は、（警察官による警備の下）緑豊かな大通りでウォーキングや自転車を楽しむことができ、市民にとって憩いの時間となっている。ただし、多くの人が歩行者天国まで車で行くという奇妙な光景が繰り広げられている。普段の街中ではできないランニングなどをしている人を見かけたが、高地なので走ると息切れしてしまうこともしばしばである。

週末の歩行者天国でウォーキングや自転車を楽しむ市民

グアテマラ市の交通

治安の関係から、私自身も車で通勤していたが、帰宅ラッシュ時の渋滞は凄まじく、2km 程の距離を 2 時間かけて移動することもしばしばあった。グアテマラ市では、大学生の通学も車であり、授業が終わると道が混むそうだ。一方通行の道路が多く、信号も少ないため、一度渋滞にはまるとなかなか抜け出すことができない。

グアテマラ市の交通渋滞は年々深刻化しており、グアテマラ政府は近年、公営のバスシステムの導入や主要道路の交差化を進めているが、抜本的な解決には至っていない。そのため、グアテマラ政府は、PPP（官民連携）による 2 つのインフラ・プロジェクトを計画している。ひとつは、「グアテマラ首都圏東西公共交通システムプロジェクト」である。PPP 推進機関の「ANADIE（国家経済インフラ開発パートナーシップ機関）」によれば、現在はプレ・フィージビリティスタディの段階であるが、地下鉄工事の建設が検討されている。もうひとつは、「グアテマラ・メトロ・リエルプロジェクト」であり、かつての鉄道の線路跡を活用して、市内の南北を縦断するライトレールの建設が予定されている（投資額 770 百万米ドル）。1 日あたり 25 万人の利用者を見込んでおり、市内の交通改善が期待されている。

グアテマラ市と火山

グアテマラ市では、市民の足は自家用車がメインのため、交通量が多く、それゆえ排気ガスも多い。グアテマラ市は高地に位置する盆地ゆえ、汚い空気が溜まってしまうのである。排気ガスも気になる所だが、なんと火山灰も降り注ぐ。グアテマラ市から約 30km 離れたところに、「フエゴ火山（火の山）」という名前の通り、毎年のように噴火している山があり、その火山灰がグアテマラ市にまで及んでくる。火山の噴火でたびたび空港が閉鎖され、市民の生活にも少なからず影響を及ぼしている。私も外を歩いていて、何だか口の中がじゃりじゃりするなと思ったら、火山灰だった経験がある。

グアテマラ市の観光・食事

中南米を旅するバックパッカーにとって、グアテマラや隣国メキシコは旅行のスタート地点であり、まずはここでスペイン語を学ぼうという人も多数いる。他方、グアテマラ市は治安が悪い印象があり、グアテマラ市を訪れたバックパッカーの多くは、空港からそのまま世界遺産となっている旧都アンティグアに向かう。実際にグアテマラ市内には外国人向けの語学学校は少ないため、アンティグアでスペイン語を学ぶ学生が多い。

世界遺産アンティグアに見劣りしてしまうグアテマラ市であるが、見どころはたくさんある。都市開発が進む一方で、市内には緑も多く、乾季には大通り沿いに「ハカランダ」の花が咲き、とてもきれいな街並みとなる。ハチドリもよく見かける。

観光の中心は旧市街周辺であり、国家文化宮殿等

歴史的建造物が多い第一区

の歴史的建造物を見ることができる。実は市内にマヤの遺跡もあり、カミナルフユ遺跡公園で遺跡の発掘現場が見られる他、その近くの小高い丘の下にはマヤのピラミッドが埋まっていると言われている。

また、首都だけあって、グルメは豊富である。伝統的なグアテマラ料理（カキック、ペピアンといったスープ料理）を供するレストランの他、スペインレストランや米国系のレストランも多い。日本料理も、“SUSHI”などはレストランやショッピングモールのフードコートにもあるくらい浸透していたが、あまり魚を食べる文化がないので、生魚のものは少ない。他のアジア系では、中国との外交関係がないせいか（グアテマラは台湾と国交を結んでいる）、中華料理店は少ないが、韓国料理店は比較的多い。

グアテマラ市では、「シュコ」と呼ばれるグアテマラ風ホットドッグも有名である。ホットドッグのパンに、ソーセージやアボカド、キャベツ等を挟んで食べる。また、市民に人気があるのが「Pollo Campero」というフライドチキンのファーストフード店である。国内外に展開しており、グアテマラ人にとってはソウルフードとなっているようである。Pollo Campero は毎年 12 月に花火大会（Luces Campero）を主催しており、グアテマラ市の冬の風物詩となっている。また、Pollo Campero は空港にも店舗があり、ここでは出国前のグアテマラ人が、大量のフライドチキンを購入し、そのまま国際便に乗り込んでいく。機内ではフライドチキンの香りが充満しているが、おそらくは米国の家族へのお土産なのだろう、と思うと心温まる香りである。私自身、帰国した今でもグアテマラで食べた Pollo の味が忘れられない。今後も都市の発展により、町の姿が年々変わっていくが、いつまでも常春で心温かい人々が暮らすグアテマラ市をまた訪れてみたい。

（本稿は、2019年9月1日時点の情報を基に作成したものである。なお、本稿は全て筆者自身の観点に基づく私見であり、何ら筆者が所属する組織あるいは所属していた組織の意見を代表するものではない。）

（おおき まさし　デロイト トーマツ ファイナンシャルアドバイザリー合同会社 インフラ・公共セクターアドバイザリー／国際開発アドバイザリー　ヴァイスプレジデント）

1　世界銀行ウェブサイトhttps://datos.bancomundial.org/indicador/SI.POV.GINI（2019年8月19日閲覧）
2　グアテマラ国立統計院ウェブサイト https://www.ine.gob.gt/ine/estadisticas/bases-de-datos/hechos-delictivos/（2019年8月19日閲覧）
3　警察庁「平成30年1～12月犯罪統計」、2019年

ラテンアメリカ参考図書案内

『メキシコにおける聖フェリーペ・デ・ヘスス崇拝の変遷史 ー神の沈黙をこえて』

川田 玲子　明石書店　2019 年 2 月　586 頁　8,800 円＋税　ISBN978-4-7503-4785-1

慶長元年（1597 年）2 月 5 日に切支丹弾圧により長崎で磔にされて殉教し、1862 年に列聖された 26 聖人の一人にメキシコ市生まれのスペイン人 (クリオージョ）フェリーペ・デ・ヘススは、メキシコ出身の最初の聖人であることから、処刑後暫くして崇拝が始まり、クリオージョのシンボルとなり、聖フェリーペ・デ・ヘスス崇拝が定着した。19 世紀中には 2 月 5 日は国民の宗教の祝日とされたが、メキシコ独立後政教分離を掲げた政府により 1859 年の国民の祝日の法改正で外されてしまった。

19 世紀に教会堂に収められた聖フェリーペ像、20 世紀における聖フェリーペ崇拝の大衆化と普遍化、メキシコ各地に遺された聖画や 20 世紀に新たに建立されたその名を冠する教会堂、その他の教会に納められた聖フェリーペ像を調査し、移りゆく時代の中で生じ広がった事象を比較することによって、一般的歴史文献学をより豊かにヴァーチャルにすることを試みた労作。各地で収録した実に多くの聖フェリーペ・デ・ヘススの図像写真が圧巻である。著者は征服期以降現在に至るまでの聖人聖母崇拝史、図像研究を専門とし、メキシコ国立自治大学で歴史学修士、ラテンアメリカ研究科で博士課程を修めた気鋭の研究者で、現在は滋賀大学等の講師。

〔桜井 敏浩〕